

「ハーフ」の可視化と両義性

——増殖するメディア実践と多様性の飼いならし——

大阪市立大学 ケイン樹里安

1. 目的

近年、いわゆる「ハーフ」の問題状況を取り上げる諸研究や(岩淵 2014, ケイン 2017, 下地 2018), 当事者によるメディア実践を含めてマスメディア／ソーシャルメディア上での「可視化」が増大しつつある。こうした状況は日本国内において出生する新生児の 50 人に 1 人が「ハーフ」である時代状況に加え, テニス選手・大坂なおみをはじめとする「ハーフ」アスリートの活躍や, 「外国人材」の獲得をめざす改正・入管法をめぐる議論の過熱によって, 「日本人」の多様性を象徴する存在としての「ハーフ」への注目が背景にある。ところで, こうした諸研究およびさまざまなアクターによるメディア実践による「可視化」は既存の社会的文脈——1970 年代に主流化した「支配的なハーフ性」とそれに伴う多様性の不可視化——との交差において, さらに「日本人」の人種化と呼ぶべき状況や当事者の問題状況にいかなる作用をもたらしているのだろうか。その様態に迫ることが本報告の目的である。

2. 方法

本報告では, 蓄積されつつある「ハーフ」研究の研究成果および, マスメディア／ソーシャルメディア上での「ハーフ」の可視化／不可視化を, 広義の「メディア実践」と捉え (Couldry 2012= 2018), その表象を分析すると共に, 報告者が実施したインタビューおよび参与観察の場において当事者が近年の「可視化」に言及する際の「語り方」を分析の俎上に挙げる。

3. 結果・考察

多様なアクターによる「可視化」の進展は当事者にとって好意的に捉えられているだけでなく, 両義的なものとして捉えられていることが明らかとなった。さらに, 「ハーフ」とは呼ばれない多様なルーツを(も)もった人々の「可視化」および「語られ方」から, 「ハーフ」研究にとどまらない新たな研究の展開可能性——ポスト・ハーフ・スタディーズ?——が示唆された。

【参考文献】

Couldry, Nick, 2012, Media, Society, World: Social Theory and Digital Media Practice, Polity Press, Ltd., Cambridge. (= 2018, 山腰修三監訳『メディア・社会・世界—デジタルメディアと社会理論』慶應義塾大学出版会。)

岩淵功一編『＜ハーフ＞とは誰か——人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社。

ケイン樹里安, 2017, 「ハーフの技芸と社会的身体——SNS を介した『出会い』の場を事例に」『年報カルチュラル・スタディーズ』5: 163-84.

下地ローレンス吉孝, 2018, 『「混血」と「日本人」——ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』青土社